

# 情報技術の

PROFESSIONAL

# 匠

第64回  
クラウドの<sup>たくみ</sup>匠



## クラウドを“当たり前”に

日本アイ・ビー・エム株式会社  
スマーター・クラウド事業統括 テクニカル・セールス  
エグゼクティブITアーキテクト

新島 智之

興味を持ったことはとことん追求していかないと気が済まない。それが学生時代から今も変わらない新島の性分だ。中学でギターを始めると、「買うと高いから」とエフェクターやオーディオ・ミキサーなどの機材を自作した。シンセサイザーを作ろうと挑戦したこともある。中学生の時、大学の工学部の研究室を訪れ、そこで目にした無数の機材に目を奪われた。あの機械を触りたい、そんな単純な理由から、工学部へ進学する。

大学では、コンピューターのプログラミングに没頭するかたわら、演劇サークルの音響スタッフとして自分の好きなことを追求した。プログラマーになるかレコーディング・エンジニアになるか、就職活動をするに当たって、その二つの道の選択に新島は真剣に悩んだ。

「自分が夢中になれる仕事しかやりたくなかったのです。選択肢は、レコーディング・エンジニアかプログラマーしかありませんでした。音楽の仕事はあまり幅がないが、コンピューター関係だったら今後いくらでもつぶしがきくのではないか。そう考えてプログラマーを選びました」

\* \* \*

1989年に日本IBMに入社し、以来20年以上にわ

たってITアーキテクトとしてシステム設計、構築、運用経験を積んできた。転機になったのは、高安DE（技術理事）との出会いだ。新島がハイ・パフォーマンス・コンピューティング（HPC）について書いた論文が、若手の人材発掘に熱心に取り組んでいた高安DEの目に止まったのがきっかけだ。高安DEの勧めで、新島は「IBM Academy of Technology」というIBMのワールドワイドの組織が主宰するテクニカル・カンファレンスに参加し、スピーチする機会を得る。当然、スピーチはすべて英語だ。

「英語は読むだけで精一杯、喋るのはまったくダメという状態でした。最初の目標は、とにかく45分間スピーチの内容を覚えて喋り切ることに、何か一つジョークを言って会場を笑わせること。高安DEをはじめとするみなさんに協力していただいて、必死に練習した結果、なんとか無事に発表でき、笑ってもらうこともできました。やろうと思えば、英語で発表することもできるのだという大きな自信になった経験でした」

その後、新島はIBMが公開している技術ドキュメントであるRedBookの執筆にも参加した。IBMでは、こうしたドキュメントを作成するにあたって、専門の編集者を

雇用している。自分の書いた原稿を編集者にレビューしてもらうことで、新島は英語の文章を書くスキルも伸ばすことができたという。

現在でも、IBMが提供するソフトウェア開発者向けの技術情報サイト「developerWorks」へ寄稿したり、カンファレンスに参加したりするなど、新島は積極的に情報発信を続けている。

「例えばカンファレンスでスピーチを行うと、少なくとも1人か2人からは後でメールが届きます。自分から発信することで、自分の組織や国を超えたさまざまな人たちと交流を持つことができるようになります。実はIBMは、英語を使わずにいようと思えば使わなくてもすむ会社です。それでも、敢えてチャレンジするかどうかで、その先がずいぶん変わるということ、身をもって体験しました」

\* \* \*

「自分が夢中になれる仕事しかやりたくない」と語る新島は、IBMに入社以降も、常に自分が夢中になれる分野を発見し、チャレンジし続けてきた。幸い、次々と新しいテクノロジーが登場するITの世界は、関心を引く技術に事欠かない。そして今、新島が最も関心を寄せているのが、クラウドだ。

「今のコンピューターの仕組みは、作るのも使うのも難し過ぎるという課題があります。実現できることに対して、あまりにも手間がかかり過ぎる。これをもっと簡単にできないのか、というのが出発点でした」

さまざまなシステム構築プロジェクトに携わってきた新島だからこそ、クラウドの可能性の大きさに気がついた。3年前に自ら希望しクラウド関連事業に異動した。

「クラウドは、世間的にはまだ“当たり前”というレベルには達していません。これから先、何年かかるのかは分かりませんが、クラウドを“当たり前”にするのが自分の仕事だと思っています」

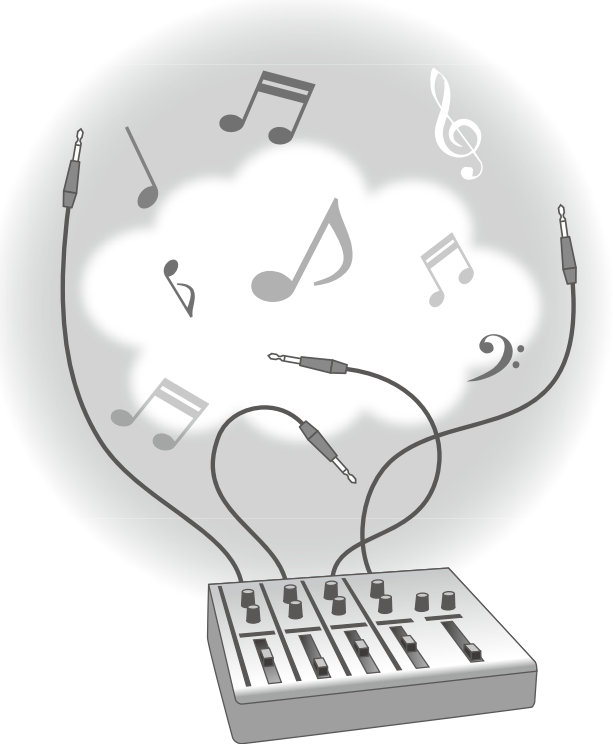
\* \* \*

プログラマーか、レコーディング・エンジニアか。25年ほど前、二つの道の選択に悩んだ新島だが、実はレコーディング・エンジニアへの夢も持ち続けている。今でも仲間と一緒に音楽活動を行っており、いつの日か本格的にレコーディング・エンジニアの道を極めたいのだ

という。

「アナログを経験してきた人間からすると、今のデジタル・レコーディングの技術は夢のような世界です。録音したテープを切ったり貼ったりしながら曲を作っていたのが、パソコンで簡単に編集できる。仲間と作った楽曲をネット上に公開して、聴いた人からのリアクションを得られるのも楽しいです」

つい先日、新島はIBMの新しいサービス「SoftLayer」を日本で初めて採用したお客様から、「新島さんの説明が良かったからSoftLayerを採用した」と、お誉めの言葉をいただき、とても感激したという。新島にとって、プログラマーもレコーディング・エンジニアも、“根”は同じところにあるのかもしれない。「自分が夢中になれる技術を使って、誰かのためにになりたい」——新島が目指すゴールはそこにある。クールな外見の裏に、熱いパッションと夢を秘める新島のチャレンジは、これからも続いていく。



## Tomoyuki Nijima

1989年日本IBMに入社。以来、ITアーキテクトとして20年以上のシステム設計、構築、運用経験を積む。大規模システムや、複雑なシステムの設計、構築を得意とする。オープンソースに関する造詣も深く、100以上のソフトウェアをAIXに移植した経験を持つ。趣味は音楽の録音と編集で、CD制作やYouTubeなどへの投稿も行っている。